

ダニエル 10 : 14 (パワポ)

Preface

今ある世界のすべての物事には、終わりがあります。

そして、その終わりには、二つの面があります。

一つは、「ああ、やっと終わった！」という安堵感や喜びを感じる面と、「ええ、終わってしまうの！ それはまずいし、困るし、怖くもある！」という恐れと不安を感じるという面です。

例えば、学校の卒業という終わりを前にしても、「やっと、こんな学校生活とおさらばできる！ 次のステップが楽しみだ！」という思いの人もいれば、「ああ～悠々自適の学生生活が終わってしまうことが寂しいし、辛いし、怖い！」という人もいるでしょう。

何かの商品の製造中止という終わりを前にしても、「ええ、もう作らないの！？ それは困るし、せつない！」という反応と、「ああ、もう無くなって良かった！ 次新しく出てくるものが期待できるし、まあ時代遅れだったから！」という反応もあるでしょう。

季節が変わる時、草木がしおれる時、若者が親元を離れる時、独身生活が終わり結婚生活に入る時、仕事を引退する時、死を迎える時、はたまた金メダルを取るといような誰が見ても華やかな終わりを前にしても、喜びと不安という相反する二つの面が伴います。

「終わり良ければ総て良し」という言葉がありますが、実際私たちが経験することの出来るすべての終わりには、必ずと言っていいほど、プラスの面とマイナスの面が共存しています。

Part One

そして何よりも、私たちは、“そんな相反する終わり”を避けることの出来ない世界に生きています。

でも聖書は、本来、私たち人間は、終わりを意識する必要もなく、終わりに対する恐れや不安を抱く必要もなく、終わるということに安堵を覚えるほどの苦しみや空しさを抱えながら生きる必要もなかったと、まず教えてください。

さらには、この世界は、元々終わりがあることを前提として造られた世界ではなく、永遠の神様の御手の内に、永遠の恵みと永遠の祝福を享受しながら、永遠の内に生き、永遠に繁栄することが許された世界でした。

なので、そこには、“安堵感と恐れという相反するものが、一緒に共存しなければならない” というような皮肉な矛盾なんかは存在しません。

そして、そのように造られた世界のことを、お造りになった張本人であられる神様は、(創世記 1 : 3 1 を見ますと)「非常に良かった」とおっしゃいました。

この「非常に良かった」という言葉は、「この先どうなるかはわからないけど、ひとまず、今この時、この瞬間はいいねえ」という刹那的な、束の間の喜びを表す言葉ではありません。

永遠を念頭に置いた最高の賛辞であり、宣言のようなものです。

その世界は、平安と平和と安堵感と喜びと希望と、あらゆる良い言葉で修飾しても修飾しきれないほどに良い世界です。

今の現存する世界の何ものをもってしても説明も出来なければ、想像することさえ困難なほどの良い世界です。

今巷で、世界的に流行っている SDGs という持続可能な社会・世界を作ろうという標語のような言葉がありますが、

この最初の時の世界は、特段特別な処置など施す必要なんか全くなく、全くの自然な状態で、永遠に持続可能な世界でした。

なのに、なのにです。

神の造られし被造物の中で最も尊く、唯一神のかたちに創造され、神と言葉を交わし語り合いながら、その関係を永遠に深く、広く、高く深めることの出来る存在であった人が・人間が、神の言葉を聞かず、聞き入れず、従わないという裏切り行為をしてしまったことにより、ありとあらゆる悪が浸透し、ありとあらゆるものが色づけられてしまった世界へと変貌してしまいました。

ローマ書の言葉を借りて表現するならば、被造物のすべてがうめき、苦しみ、虚無に服し、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、破壊、悪だくみ、陰口、中傷、神を憎み人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を企み、親に逆らい、浅はかで、不誠実で、情けも知らず、無慈悲で、弁解の余地もない世界となってしまいました。

かと言ってすべてが真っ黒だというわけではありません。

自然を見れば、なおも美しく、壮大で、雄大で、緻密でありますし、

人を見てもなお、思いやりがあれば、配慮もあり、それなりの善だってあります。

しかし、万物すべての領域において、創造主なる神を裏切った人という存在のせいで、白と黒と灰色が入り混じってしまった罪な世界へと成り果ててしまいました。

それゆえに、どんなに **SDGs** 持続可能な社会・世界を、人間を含めたすべての被造物の力で何とか作ろうとも、部分的には可能かもしれませんが、限界があり、やがて滅びることを避けることが出来なくなってしまった世界へと成り果ててしまいました。

穴ぼこだらけのバケツに、どんなに勢いよく水を流し入れたとしても、空っぽになってしまう運命に抗うことは出来ないということに、例えることが出来るかもしれません。

もちろん、だからと言って、今行われている持続可能な世界に作り変えようという活動が意味のないことだと言っているわけではありません。

神の造られし世界に対する思いやりと恵みを覚えることが出来るように、これまでの失敗を糧に、神様が人々を導いておられるとも言えるでしょう。

まあ、こんな世界を、創造主なる神様は、新たに造り直すとお決めになりました。

そして、天地万物を新たに造りかえるために、この罪なる世界、私たちの生きているこの世界に元々無かった“終わりの時”を定め、滅ぼすと決定なさいました。

ただし、これは神のエゴでもなければ、横暴でもありません。

むしろ、回復であり、慰めであり、救いであり、祝福であり、愛です。

Part Two

このことを、一卷完結の書物で良く表しているのが、旧約聖書のイザヤ書です。

イザヤ書は、聖書に書かれている内容がすべて含まれていると、“小さな聖書”とも言われ、聖書66巻になぞらえて、66章で構成されていますが、このイザヤ書には、一本の大きな軸のようなものが、始めから最後に至るまで通っています。

それは、再生です。 言い換えますと、再創造です。

イザヤ書1章から39章までは、この罪なる世界の象徴のようになってしま

っているイスラエルの民たちに対する神の怒りと裁きと滅びの言葉が記され、40章から66章までは、その怒りと裁きと滅びからの回復と慰めと救いが記録されています。

実際に見てみたいと思います。

イザヤ1：2－7（パワポ）

子であるイスラエルが、父である神を捨て、離れ、落ちぶれ、全身が弱って息も絶え絶えに、そのすべてが荒れ果ててしまっていると言います。

つまり、その罪ゆえに、滅びという終わりを経験していると言うわけです。

しかし、この滅びには目的がありました。
それは、回復と再生です。

イザヤ1：25－26（パワポ）

灰汁や浮きかすに例えられている不純物をすべて取り除くための滅びであり、その後に、回復と再生があると言います。

さらに、40章に行ってみますと、回復と再生に至るための慰めと癒しと救いがあると宣言されています。

イザヤ40：1－2、26－31（パワポ）

神は、神を捨て、離れ、落ちぶれ、全身が弱って息も絶え絶えで、荒れ果ててしまった者たちに、新しい慰めと新しい力と新しい勢いと新しい救いをお与えになると言います。

で、この回復と再生が、何処に繋がるかと言いますと、イザヤ書65章です。

イザヤ65：17－25（パワポ）

（ここで言うエルサレムとは、所謂、今ある地理的なエルサレムを指しているのではなく、神の主権とその存在をすべての神羅万象、天地万物が認める世界のことを意味しています。）

神は、新しい慰めと新しい力と新しい勢いと新しい救いをもって、全くもって新しい世界をお造りになると啓示しています。

この新しく造りかえられた世界には、死もなく、終わりもなく、盗みも嫉妬も無駄も空しさもなく、弱肉強食もなく、祈りが聞かれているんだかないんだか分からないようでもなく、愛なる神を満喫できる世界です。

罪ゆえに滅びざるを得ない世界を終わらせ、新しい天と新しい地を新たに創造することをもって、回復と再生の恵みを完成させるとおっしゃいます。

この滅びと再生の祝福を最も分かりやすく体現しているのが、主イエス様の十字架の死であり、復活です。

この主イエス様の死と復活による人類の罪の贖いを記しているのが、皆さんよくご存じのイザヤ書 53 章の内容です。

神が世界を造りかえるお働きの中心に据えたのが、罪人となってしまった人類の救いであり、人類の救いと回復なくして、新天新地の完成はないとお決めになりました。

「なんでそうされたのか？　なんで、わざわざ人を新天新地の完成に組み入れたのか？」という疑問が出て来たところで、「こうです」という答えをすることさえも出来ないほどに、私達の理解や納得を遥かに超える神の愛です。

愛なる神は、反抗し、反逆し、墮落し、敵対関係に陥った汚れし一切のものすべてを一つに集め、一つにする、この再創造の業を完成させるための核として歴史のど真ん中に据えたのが、イエス・キリストの十字架の贖いです。(エペソ書に行ってみましょう)

エペソ人への手紙 1：7－11 (パウロ)

今この箇所で言います。

神の奥義とは、てんで散り散りになっている天にあるもの、地にあるもの一切を新たに集め一つにする御国を完成させることであり、

その御国という新たな世界に住まうために、キリストの血の贖いによって背きの罪が許された者たちこそ、クリスチャンだと言います。

福音とは、滅びゆく、沈みゆく船のような世界と共に沈みゆくのではなく、そこから脱し、新たな世界へと入れられる道があるということです。

そして、救いとは、その世界に入れられることです。

聖書の教える救いとは、気分が良くなるとか、願いが叶うとか、元気になると

か言うレベルで収まるものではありません。

聖書の救いは、この再創造という神の業の祝福に入れられることです。

つまり、人も被造物も、もうこれ以上終わりのない、永遠を回復させられたものになるということが、救いです。

クリスチャンは、この福音と救いを、この滅びゆく世界で宣べ伝え、置かれた場所で体現し、新たにこの救いに加えられる人々を起こし、起こっていく恵みを最前線で見、喜ぶために、この世界に生かされています。

Part Three

聖書は、終わるといふことの問題の深刻さについて語り、終わらなければならぬ世界に生きてしまっている、生きざるを得なくなってしまった由々しき事態について真摯に語ります。

そして、なりよりも、終わるといふことを何かの幻想で、ファンタジーのような架空の話ではなく、事実だと真剣に語ります。

そんな馬鹿な話があるかと話を反らし、視線をずらし、おかしい宗教染みた話のように考えるようとする私たち人類に対して、事実だと真つすぐに語ってきます。

そして、ダニエルです。

70年ぶりに故郷エルサレムに帰還した同胞の民たちが苦境に陥っていることを知り、彼らのために心を痛めながら21日間の断食祈禱をしていましたが、そこに天使ガブリエルが、神からの祈りの応答を携えてやってきました。

その祈りの応答の内容というのが、“終わりの日”についてのことでした。

一見しますと、祈った内容と祈りの応答が噛み合っていないように思えます。

でも、確かに、祈りの応答として、“終わりのこと”を携え、知らせに來ました。

ダニエル10：14（パワポ）

ここで言う“終わりの日”というのが、何を指して言っているのか？ということとは、一様ではありません。

イスラエルの民たちの復興後の生活が300年程しか続かなかったという史実

を指しているとか、イエス・キリストがいらっしゃる前までの旧約時代の終了を、つまり、BC紀元前の終了を指しているとか、いくつかの見解がありますが、ダニエル書11章や12章の内容と合わせて見ていきますと、

世界の歴史の中で起こった特定の事件や時期のみを指しているのではなく、世界の終り・終末のことをも指しているものだということが見えてきます。

ダニエル11：45（パワポ）

ここにある“彼”とは、現れては消え、現れては消えていく、歴史上の無数の権力者たち、そして、広くは、その権力者たちに連なる人間社会・世界のことを指します。

即ち、「ついに彼は終わりを迎える」という言葉は、長い時間刻み続けてきた歴史の名の付くものすべてが終局を迎えることになるということです。

ではなぜ、神様は、ダニエルの同胞の民たちを助けてくださいという祈りに対して、“終局について知らせる”という祈りの応答をお与えなさったのでしょうか？

それは、“目の前に起こっていることが私達のすべてではない”ということを教えるためでした。

私達は、毎日、目の前に起こる問題に翻弄され、目の前に起こっている問題があたかもすべてであるかのようなひつ迫感を感じながら生きていますが、

神様はダニエルに、今一度、まず最も大事なこと、つまり、すべての物事には終わりがあるという希望と、最終的な終わりに連なる永遠の御国が造られ、そこに入れられる祝福と、

しかも、（これが一番大事なこともかもしれません）終わりに対して恐れを覚える必要のない人生を生かされているということを、思い出させたかったのではないのでしょうか。

イスラエルの民たちが苦しんでいることには、必ず終わりがあり、しかもその苦しみには、神のご意図があると。

そして、その神の意図が、御旨が、その人生に積み上げられ、積み重ねられ、永遠の希望がある終局・終末に至るようになっているから、安心しなさいと示してくださっているわけです。

Part Four

今日のこのダニエル書の御言葉をここ何日かずっと思い巡らしていたのですが、そんな時に、一つの言葉に出会いました。

それは、聖アウグスティヌスが書いた「告白」という本の中の言葉です。

この「告白」という本は、アウグスティヌスが、幼い頃から思ってきたことを思い出せる限り思い出しながら、信仰を持って詳細に書き綴った自叙伝のようなものなのですが、もうこう、目から鱗が落ちるような珠玉のような言葉がたくさんあるんです。(中公文庫や岩波文庫から発売されているので、もし、機会があったら読まれるといいと思います)

で、その中の少年時代のことを回想している箇所、こんな言葉に出会いました。

「おお主よ。私の祈りを聞いてください。主がお赦しになった懲らしめと訓練を恐れないようにしてくださり、私が歩むすべての悪の道から離れるように導く、あなたの慈しみ深い恵みについて、感謝と賛美を献げさせてください。

そのようにして、以前、私が追っていた世の中のあらゆる誘惑と快楽よりも、あなたご自身がより甘美な喜びとなって下さり、ただあなたのみを愛するようにしてください。

私のすべての心を献げあなたを愛するようにし、私のすべての力を持ってあなたの御手を掴むようにし、**この世が終わるその時まで**、私からすべての誘惑を取り除いてくださいますように。」

このアウグスティヌス言葉、祈りの中で、私自身が特に惹きつけられた言葉は、**“この世が終わるその時まで”**という言葉です。

なぜなら、アウグスティヌスは、**この世が終わることを**知っていただけでなく、すべての経験、すべての葛藤、すべての霊的戦い、すべてのことを、この世が終わるその時という希望に焦点を合わせて歩んでいたということが、見て取れたからです。

懲らしめと訓練はなるべくならば避けたいものですが、その懲らしめと訓練さえも、この世が終わるその時の御国に入れられるために必要な過程だと告白するわけです。

今、神様は、ダニエルを始めとするイスラエルの民たち、そして、この聖書の読者である私たちに至るまで、知っておいて欲しいことがある、

それは、(先ほども言いましたが)「今という時間が無駄に終わることはなく、希望に満ちた終わりに繋がっているから、安心なさい」ということです。

Conclusion

私達の日々の生活は、一日一日生き抜くことでさえも、正直大変です。

だからイエス様は、「明日のことは明日が心配するから、今日は、今日一日を生き抜くことに専念するだけでいいから」と、慰めの言葉をかけてくださいました。

そして、その今日一日生き抜くことが、希望に満ちた終わりへとつながり、永遠の希望へとつながっていくから、心配しなさんなと仰ってくださいます。

たと思えば通りに行かなくても、たとえ責められても、たとえつまづいても、たとえ倒れても、たとえ床に伏しても、たとえ弱くても、たとえ起き上がる力が無くても、

私たちすべてのために、ご自分の御子さえ惜しまずに、死に渡された神が、私達に良くしてくださらないことなんかありません。(ローマ書 8 : 32)

すべてを恵みに変え、やがて永遠の御国へと導いてくださいます。

終末に希望を置くとは、こういうことです。

まことの神、イエスキリストを信じる私たちの人生は、矛盾した終わりという滅びに満ちているこの世界に巻き込まれ、飲み尽くされ、跡形もなくなるような人生では、決してありません。

滅びのある世界は終わり、終わりのない、それはそれは良い世界へと入れられる特権に与っている人生です。

だから、今日も生きましょう。 やれるところまで、精いっぱい今日という日を生きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 1 : 9 - 10 (奥義とは～)